

---

# 迷信

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷信

### 【Nコード】

N6009Q

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

眞鍋秀吉は健康にいいと聞いたなら何でもしてみる主義だ。それで歯磨き粉を使わないといいと聞いてしてみたところ。ある非常に政治的に偏っている週刊誌を読んで書いた作品です。コメディイですが風刺を利かせています。

## 第一章

迷信

眞鍋秀吉は健康を大事にしている。それで何か健康にいいと聞くとすぐにそれをしてみる。そうしないでいられない性格なのである。

「あなた、今度はそれ？」

「うん、やってみているよ」

妻の典子の言葉に応える。応えながらココアを飲んでいる。背は高く痩せた身体をしている。額は少し広くなってきたいて顔も細い。しかも色白である。目は優しくまさにスーパーの店員といった外見だ。実際に仕事はそれである。

「身体にいいんだって？」

「そうらしいわね」

典子は無表情に答えてきた。

「そう聞いているわ」

「だからさ。やってみてるんだよ」

妻に応えながらココアを飲み続ける。

「こうしてさ」

「まあ。ココアは美味しいし」

妻が気にするのはそこだった。

「安いし。困るものじゃないわね」

「森永ココアな」

彼が今飲んでいるのはそれだった。

「いや、かなりいいね」

「森永ココアなの」

「別にそれでもいいだろ？」

「いいけれど何かキン肉マンみたいね」

妻が話に出してきたのはこのヒーローだった。実はこのヒーローは牛丼だけでなく森永ココアも好物なのだ。なおエネルギー源は大

蒜である。

「それじゃあ」

「じゃあ四十八の殺人技でも身に着けるか」

「そうしたら？プロレスラーにでも転職して」

「そうするか……ってあまり柄じゃないな」

「絶対に向いてないわね」

それは断言するのだった。

「はつきり言つて」

「じゃあ転職はしないよ」

秀吉もあつさりと話す。

「やっぱりスーパーの店員でいいよ」

「そうなの」

「しかし。健康法つて色々あるね」

そのココアをもう一杯入れた。ホットミルクの中にココアを入れてそれをスプーンでかき混ぜる。それで完成する。実に簡単である。

「本当に」

「中にはおかしなものもあるけれどね」

「そうかな」

「おしつこ飲むとかそういうのは止めてね」

典子はそれはきつい調子で言ってきた。

「絶対にね」

「ああ、そういうのはね」

彼もすぐに頷く。

「やらないから」

「絶対によ。わかったわね」

「ああ、流石に自分のそうしたものを飲んだりできないからね」

「そうよ。そういうのは絶対に止めて」

「わかってるよ」

こんな話もした。そのうえでココアを飲んでいく。そうしてだった。

ある日のことだ。彼はとある週刊誌を読んでいた。そこに歯磨き粉が身体によくないと書かれていたのである。

何でも歯をぼろぼろにして歯から身体全体を悪くしてしまうらしい。歯は全ての健康の元だから大事にと書かれていた。それを讀んでだ。

「そうだったのか」

歯磨きのこととは考えていなかった。読んで驚愕してしまった。

彼はすぐに歯磨き粉で歯を磨くのを止めた。そのまま何も使わずに歯磨きをするようになったのである。

典子もそれに気付いた。それで怪訝な顔で夫に問うた。

「それも健康法？」

「ああ、そうなんだ」

「こつ妻に答える。」

「歯磨き粉が身体に悪いって聞いてね」

「歯磨き粉が身体に!？」

「そうらしいよ。何か歯をぼろぼろにするらしいじゃないか」

「こつ雑誌の受け売りを妻に話す。」

「歯が悪くなったらそれは身体全体にも影響するじゃない」

「ええ、そう言われてるわね」

「だからだよ。もう歯磨きは使わないんだ」

「そうするといつのである。」

「それでなんだ」

「おかしな話ね」

妻は夫のその話を聞いてだ。女子高生の時と比べると多少肉付きのよくなった首を傾げさせた。黒い髪を少しパーマにして丸く大きな目が印象的だ。

## 第二章

「それって」

「おかしいかい？」

「何で歯磨き粉が身体に悪いのよ」

彼女はまた言った。

「確かに研磨剤だけだと消毒もしてくれるし」

「だからいいっていうのかい？」

「そうよ。そんなおかしな話聞いたことないわよ」

こう話すのだった。

「そんなのってね」

「そうなのか？」

「おかしな話ね。止めた方がいいじゃないの？」

怪訝な顔で夫に告げた。

「それは」

「そうかな。おかしいかな」

「私はそう思うわ」

また夫に述べた。

「それはね」

「まあ色々と細かく書いてあったしおかしな話じゃないだろ」

その雑誌には学者が出て来て話をしていた。学者という権威を無意識のうちに信じてだ。彼はそのうえで決めたのである。

「だからやってみるよ」

「そうするのね」

「うん、だからね」

また話す彼だった。

「やってみるよ」

「何ともなければいいけれどね」

典子はかなり懐疑的な顔であった。しかし秀吉はそれを続けた。

しかしであった。

まずはだ。バイトの女子高生からこう言われた。

「チーフ最近お口臭いです」

「ちゃんと歯を磨いてますか？」

「磨いてるよ」

すぐにこう答えた。客商売なのでそれは気をつけている。

「一日二回ね」

「それでも臭いですよ」

「ええ、本当に」

「身体が悪いとか？」

「別にそれは」

それはなかった。すぐに否定できた。

「ないけれど」

「嘘ですよ、だって最近物凄く息臭いですから」

「何か急に」

「本当にね」

「そうかな」

言われてもだ。首を傾げるばかりだった。

「そんなに臭いかな」

「はい、何か腐ったみたいな」

「物凄く酷いですよ」

「身体どこが悪いとしか」

「そんなのではないけれど」

「こう返す彼だった。」

「別にね」

「じゃあ歯を磨いてないとか？」

「うわ、それ最悪ですよ」

実に女子高生らしい言葉であった。

「そんなのって」

「そうよね。有り得ないし」

「歯は磨いてますよね」

「当たり前じゃないか」

何と言っているんだといった口調だった。

「そんなの。ちゃんとしないと健康にも悪いよ」

「はい、歯が命ですから」

「そうそう」

「何気に古い言葉知ってるね」

秀吉は二人が昔のCMのことを話に出してきたので思わず「う言  
った。」

「君達が生まれた頃のCMだったんじゃない」

「ああ、そうでしたっけ」

「何か覚えてるんですよ」

「覚えてるんだ」

「とにかく。お口凄く臭いですから」

「奥さんにも嫌われますよ」

こんなことを言われた。そしてであった。

### 第三章

その妻にもだ。実際に言われてしまった。

「口臭酷いわよ」

「そうか」

「そうよ。だから歯磨き粉使ったら？」

彼女は具体的に話した。

「口臭予防にもなるし」

「しかしな。身体に悪いしな」

「どうかしら。歯磨き粉使わない方が身体に悪いんじゃないの？」

「それはないだろ。やっぱり」

「そうだといいいけれどね」

妻の言葉は冷めたものだった。

「本当に」

「だから。歯磨き粉はさ」

「学者さんが言っていたのね」

「だから間違いないよ」

学者の権威を盾にした言葉だった。

「それはね」

「どうかしら、本当に」

「問題ないって」

彼はあくまでそう信じていた。しかしであった。

遂にだ。彼は虫歯になってしまった。それもかなり酷い。

「歯医者行って来て」

妻の言葉は冷たいものだった。視線もだ。

「すぐにね」

「冷たくないかい？随分」

「あなたの為を思って言ってるのよ」

しかし妻はこう言うのだった。

「だから。歯は健康の元でしょ」  
「うん」

「歯が悪かったら他の部分も悪くなる」  
夫の言葉をそのまま言ってみせたのである。まさにブーメランだ。  
「だからよ。すぐに行つて来て」

「わかつたよ、それじゃあ」  
こうして妻に背中を押されて歯医者に行った。そうして口を開いて歯を見せるとだった。いきなりこんなことを言われたのだった。

「うわ、これは酷い」  
「酷いですか」

「歯がぼろぼろですよ」  
歯医者はマスクの奥から顰めさせた声で告げてきた。

「虫歯が酷くて」  
「そんなにですか」

「まあ治療できますけれどね」  
それはできるといふ。

「しかし詰め物を結構しないといけないですね」  
「そうですね」

そう言われて落胆した秀吉だった。

「そこまでなんですか」

「はい、それでなんです」

「それで？」

「歯磨きはちゃんとしてましたか？」

歯医者もまたこう問うのである。

「それは」

「してましたけれど」

「いや、歯がかなり汚いですから」

「こう言つたのだつた。」

「口臭も酷いですし」

「すいません」

「歯磨き粉とか使ってます?」

そして歯医者だ。このことを尋ねてきた。

「それはどうですか?」

「えっ、それは」

「若しかして使ってないですか?」

歯医者の言葉が怪訝なものになった。

「まさかと思えますけれど」

「それってまずいですか」

「かなりまずいですね。最低でも塩でも使わないと」

「けれどあの雑誌で、ですね」

秀吉はまず雑誌から話を出した。

## 第四章

「学者さんが言っていましたし。歯磨き粉は危ないって」

「ああ、あの雑誌ですか」

歯医者雑誌は雑誌の名前を聞くとすぐに反応してきた。

「あの雑誌は駄目ですよ」

「駄目ですか」

「でまかせばかり書いてますから。あれを買ったら駄目だ、これを買ったら駄目だってしよっちゅう言っていますよね」

「はい」

「全部出鱈目なんですよ」

「けれど科学的根拠とか統計とか出して」

「詐欺師だつてそうしますよ」

歯医者の言葉はここでは辛辣だった。

「だってばれたら困るでしょ」

「そりゃ自分から詐欺師つて言う人はいませんよね」

「そういうことです。その根拠とか統計も出鱈目ですから」

「そうだったんですか」

「そうですよ。批判する本も出ていますから」

歯医者には真剣な顔で話した。

「よく勉強して下さいね」

「じゃあ歯磨き粉は」

「使った方がずっといいです」

はっきりに言われてしまった。

「絶対に」

「そうだったんですか」

「消毒にもなりますし汚れも取れますし口臭も消えます」

「本当にあの話は」

「全く以て出鱈目です」

まさにそうだと言いつつ切ってこられた。

「そういう雑誌だと思っただけです」

「うわ……」

「自然食とか。自然のままとかいいですね」

「そういう手の雑誌でよく言われることである。」

「それはいつも正しいとは限りません」

「いつもそうではないですか」

「中には出鱈目なものもあります。携帯電話の電波がどうとか言っ  
てそれを人類滅亡の序曲とか喚んでいる漫画がありましたね」

ノストラダムスとかそうした存在がやたらと出てそのうえで人類  
滅亡だと喚く漫画である。狂人が騒いでいるギャグ漫画というのが  
その評価である。

「あれと同じですから」

「はあ」

「気をつけることです。健康だと言ってもそうではないこともあります」

それが他ならぬ歯磨き粉の話だった。

「それは気をつけて下さい」

「よくわかりました。まずはその根拠もしっかりと調べてですね」

「何でも鵜呑みはいけません」

歯医者もこうも話してきた。

「よく覚えていて下さい」

「わかりました」

秀吉は溜息と共に頷いた。そしてまた歯磨き粉を使って歯を磨く  
ようになった。しかも後で妻の典子からこう言われたのだった。

「えっ、そういう話があったの」

「そうよ。歯磨き粉を使って歯を磨いたらね」

「病気が治ったんだ」

「そうなのよ」

こう夫に話していた。

「未開の部族の人達がね」

「それで治る病気もあるんだ」

「だから。歯は命よ」

彼女もこんなことを話す。

「よく調べないとね」

「全くだね。健康が大事といつても」

秀吉もここであらためて話す。

「何でも鵜呑みにしたら危ないね」

「そういうことよ」

このことをあらためて知った秀吉だった。全く以てその通りだと心に刻み込むのだった。

迷信 完

2010・6・29

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6009q/>

---

迷信

2011年2月2日21時55分発行